

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32621

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590231

研究課題名(和文) ボランティアな学校ネットワークによる教育効果に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative Research on Learning Outcomes at Voluntary School Network

研究代表者

丸山 英樹 (MARUYAMA, Hideki)

上智大学・グローバル教育センター・准教授

研究者番号：10353377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまでの研究蓄積から、ユネスコスクール・ネットワーク(ASPnet)によって得られる学習成果と教員が主体的に継続的な教育実践を支える環境整備について、調査研究を行った。2014年11月に開催された「国連持続可能な開発のための10年」最終世界会議にあわせ、ASPnetの国際会議(含生徒の自主運営によるフォーラム)に向けた準備プロセスが教員の主体性に関連することが分かった。このことは、ASPnet実践で先行する「バルト海」プロジェクトにおいても同様であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This research, based on literature review and previous fieldworks, focused on learning outcomes from UNESCO Associated School Project Network (ASPnet) and on systemic environments supporting teacher's lifelong learning as an active participant. The study found the process of preparation for the United Nations Decade of Education for Sustainable Development, held in November 2014 in Japan, developed their active and continuous engagements into the ASPnet activities. The same findings were also confirmed at "Baltic Sea" Project as the UNESCO HQ identified as a good ASPnet good practice in the world.

研究分野：教育学

キーワード：ESD 生涯学習 ユネスコスクール ネットワーク型学習 持続可能な開発のための教育 バルト海プロジェクト ユネスコスクール・ネットワーク ASPnet

1. 研究開始当初の背景

国連の「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD) の 10 年 (2005 ~ 2014 年)」が進行していた中、国連教育科学文化機関 (UNESCO) は世界各地で展開される ESD 実践と成果についてコンピテンシー概念等によって整理しつつある。日本の学校教育においては ESD 実践の拠点としてのユネスコスクール・ネットワークの活用を目指しているが、その教育効果は不明瞭のままであった。

代表者は次のような研究を行い実践研究へ貢献してきた結果、教育効果と継続性の課題が重要であると考えに至った。まず、日本/ユネスコパートナーシップ事業 (平成 20、22 年度文部科学省委託事業) で ESD による学力保証とユネスコスクールにおける実践前後の変化について整理した。また、日本政府の UNESCO 担当である日本ユネスコ国内委員会に設置されたユネスコスクール質保証ワーキンググループ委員 (平成 23、24 年度) として、国内外のネットワークの動向を整理の上、国内ユネスコスクール・ガイドラインを作成した。さらに、平成 22 年以降は大阪、岡山、宮城において ESD 実践とネットワークにかかる助言者として評価に関わっている。国外では、UNESCO 本部が世界で最も成功しているネットワークとして認める「バルト海プロジェクト」について調査した (平成 20 ~ 23 年度基盤 B 海外学術: 代表・永田佳之)。

以上の研究から、次の 3 つの知見を得ることができた (永田 2010; 2012, 丸山 2011; 2012):

- 学習者が主体性を持ち、学習の継続を見せる教育実践には、題材に地元の課題または国境を越えた共通課題を含むことが多い。
- 教員は学習成果が分からないままユネスコスクールの実践を行なっていることがある。
- 活動的な教員個人が異動すると実践も滞る等引き継ぎ及び教員研修に問題がある。

2. 研究の目的

国際的な学校ネットワークの分析と新たな構築に関する研究成果を踏まえ、具体的な教育効果と持続可能な環境整備と背景を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

これまでの研究により、「学習者が主体性を持ち、学習の継続を見せる教育実践には、題材に地元の課題または国境を越えた共通課題を含むことが多い」と言えそうだ。それをもとに、次の 2 課題に取り組んだ。

(1) ユネスコスクールによって得られる学習成果及び課題とは何か

(2) 教員の主体性が発揮され、継続的な教育実践を支える環境整備とは何か

研究の実施については、次の通りであった。

1 年目 理論的整理と仮説構築、国内調査 (大阪 ASPnet)、海外調査 (BSP、タイ/中国)

2 年目 岡山での調査、海外調査 (ユネスコ、BSP)

3 年目 総括、学会発表 (個別・チーム)

4. 研究成果

本研究期間を通して、次の点について示唆を得た。

- 世代間の継続・連続性: BSP においても、プロジェクト開始した第 1 世代 (バルト海の汚染へ取り組み、冷戦下での克服、運動体としての ID) と第 2 世代 (汚染は解消済、グローバル化・ネット化、英語に不自由少ない) の価値観の違い。第 1 世代の思い出話に付き合いきれない第 2 世代と、後者のコミットメントに向けた方略は SNS 等のソフトウェアによる支援、及び人間関係の構築による支援が重要である。
- 「学力」を支える議論と社会の環境: 従来からの「学力」および学校文化・役割期待が大きく異なることから、ASPnet 活動の目的も異なる。日本では総合学習などのエクストラと捉えられるが、BSP では元来の教育活動との親和性が高いため、実践する教員の抱える主たる課題は資源の有無となる。日本の教員は ESD 実践の意義から説明が必要になるため、二重の課題を抱える。
- 多様なアクターの関与と調整役: BSP には小国が多く参加するため MOE も柔軟に資源配分・投入を行う。日本では制度が強固なため効率的だが、意思決定に時間がかかり、変化への対応が難しい。

また、研究協力者として招聘した BSP 主幹メンバー (Soren Levring 氏及び Kersti Sogel 氏) からは、次のような報告を得た。It was clear for us that the Japanese society still is very hierarchized also in the

education sector. The most visionary teachers, school leaders and scientist are looking for networking as a way for share knowledge and work innovatively. For UNESCO Education for Sustainable Development Student Forum in Okayama, attended by 800 people from 32 countries, each country four students and one teacher. The competition was very tight for participation in the conference, they received more than 5000 request. Every young delegate had a host who was always present and, if necessary, translated. The entire conference was led by young people themselves - it was a voluntary work. As the young leaders of conference speak in Japanese, there was a professional simultaneous translation in English, Japanese and French. The existence of professional translation was very important because the quality of the note takers, by the students, was not very high and lead to confusion. It was a good experience to leaders, that if things did not always run smoothly, and there are problems, it is time to take out, even if hundreds of people are waiting to analyze the issue and find a solution. Japanese language is very polite, and the translation into English may not have come out the idea the actual text. Following the Student Forum, their teachers' workshop was held with two main themes: a) What kind of activities are carried out in each country for sustainable development? b) What is the teacher's role and activities in promoting education for sustainable development? Discussion and speeches took 3 hours. The teachers were in a circle around the tables and discussed these issues and made a presentation of group work. Then there was one overview of all. The aim of the conference was to create a network, understand each other's similarities and differences, and understand the needs and opportunities of teachers and students to contribute to the global worldview gap. The conference was important to show the activities of the education for sustainable development activities and continue activities even after the end of the decade.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者

には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- 丸山 英樹, ユネスコスクール・ネットワークに見られる持続可能性: パルト海プロジェクトと大阪 ASPnet を事例に, 国立教育政策研究所紀要, 有, 143, 2014, 3, 183-195.
- Maruyama, H., Sustainable Security for Lifelong Learners and Societies, Journal of International Cooperation in Education, 無, 15(4), 2014, 4, 139-155.
- 平沢直樹・成田喜一郎, 東日本大震災における発達障害者の PTSD と学校危機管理 = ケアの在り方: 発達障害者との協働エスノグラフィーを読み解く, 東京学芸大学教職大学院年報, 無, 第3集, 2015, 3, 187-202.
- 永田佳之, グローバル時代における学びの行方: 教育振興計画に見る三つの方向性, 教育展望, 無, 60 (3, 2014, 29-33.)
- 永田佳之, サステイナブルな学校づくりへ: 楽しい ESD への第一歩, 開発教育, 無, 61, 2014, , 99-104.
- 永田佳之, グローバル化時代に求められる教育とは: (他者を変える教育) から(自己が変わり、社会が変わる学習) へ, 信濃教育, 無, 1526, 2014, 1-13.

〔学会発表〕(計 5 件)

- Maruyama, H., Are We Sustainable?, UNDESD World Conference in Aichi-Nagoya, 2014, 11, 11, 名古屋国際会議場, 名古屋市
- Maruyama, H., You are a Part of the World!, The Baltic Sea Project National Camp in Estonia, 2015, 1, 11, Janeda, エストニア
- 永田佳之, 国際的な潮流から見た日本における ESD の独自性と実践課題, 日本国際理解教育学会 第 23 回 研究大会, 2013, 7, 6, 広島経済大学
- 永田佳之, 国際的な視点から見た日本のオルタナティブ教育, 文部科学省全国フリースクール等フォーラム, 2014, 11, 24, 文部科学省
- 伊井直比呂, 2014 年ユネスコ世界大会高校生フォーラムへのプロセス ---2012 年度準備セミナー & 3カ国フォーラムからの成果と課題---, 日本国際理解教育学会 第 23 回 研究大会, 2013, 7, 6, 広島経済大学

〔図書〕(計 4 件)

- 丸山英樹, 国際開発ジャーナル社, 国際協力用語集, 2014, 353, 51, 学習成果、学習到達度
- 成田喜一郎(編著), 東京学芸大学, ESDカリキュラム開発の方法 2014, 2015, 160, 32, カリキュラム開発の方法 2008-2014, 新たな始まりにむけて
- 成田喜一郎, 第4章教職大学院における教育研究における「哲学」の可能性: 実践と理論との架橋・往還の彼方に, 林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著, 東信堂, 『教員養成を哲学する: 教育哲学に何ができるか』, 2014, 332, 15,
- 永田佳之, ぎょうせい, 多文化共生社会における ESD・市民教育, 2014, 165-184, ポスト『国連 ESD10 年』の課題: 国際的な理念と国内の実践との齟齬から見えてくる日本

6. 研究組織

(1)研究代表者

丸山 英樹 (MARUYAMA, Hideki)
上智大学・グローバル教育センター・准教授
研究者番号: 10353377

(2)研究分担者

永田 佳之 (NAGATA, Yoshiyuki)
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号: 20280513

伊井 直比呂 (II, Naohiro)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号: 30600001

成田 喜一郎 (NARITA, Kiichirou)
東京学芸大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 80456251